

1 研究主題

一人一人が確かな学力を身に付け、豊かに表現できる子どもの育成

～個に応じた指導と言語活動の在り方～

2 主題設定の理由

(1) 社会的要請から（新学習指導要領の基本的な考え方）

21世紀における「知識基盤社会」においては「課題を見いだし解決する力」「知識・技能の更新のための生涯にわたる学習」「他者や社会、自然や環境と共に生きること」など、変化に対応するための能力が求められる。このような時代を担う子どもたちに必要な能力こそ「生きる力」である。しかし、これまで「生きる力」の理念を実現するにあたって様々な課題があった。「生きる力」の意味や必要性について学校関係者・保護者・社会との間に十分な共通理解がされていなかったこと、子どもの自主性を尊重するあまり教師が指導を躊躇しているのではないかということ、各教科における知識・技能を活用する学習活動が十分ではなかったこと、授業時数が十分ではないこと、豊かな心や健やかな体の育成について、家庭や地域の教育力が低下したことを踏まえた対応が十分ではなかったことなどである。

これらの課題を解決するために、本年度4月から小学校においては、新学習指導要領が全面実施となった。今回の指導要領は、約60年ぶりに改定された教育基本法のもとでの改訂ということで、それに伴って改正された学校教育法等の趣旨を生かした授業づくりが求められている。改正された学校教育法では、学力の重要な3つの要素として、「基礎的な知識及び技能」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」が挙げられている。これを受けて新学習指導要領では、引き続き「生きる力」の育成を重視するとともに、各教科の授業の中で、言語活動の充実を通して、子ども達の思考力、判断力、表現力等の育成を図ることが求められている。

そこで、本校では少人数・複式学級の特性を生かした、個に応じたきめ細かな指導の工夫や子どもたちによる学び合い等の言語活動の充実を図り、学習内容の確実な習得と活用、そして表現力豊かな子どもの育成を目指していきたい。そのことが「生きる力」をもった子どもの育成につながると考え本年度の研究主題を掲げた。

(2) 本校の教育目標の具現化のために

本校の教育目標は、「豊かな人間性と創造性を備え、『徳・知・体』の調和のとれた自主的で実践力ある児童を育成する。」であり、①自ら学習に取り組む子ども（自主）②力を合わせて働く子ども（協力）③ふるさとを大切に子ども（友愛）④体をきたえる子ども（健康）を育成したいと考えている。基本的な態度として、恵まれた地域の自然環境を活かして、徳・知・体の調和のとれた人間性豊かな児童を育成すること、さらには、地域の歴史や伝統を基盤にした21世紀を担うたくましい日本人を育成することを念頭に使命感をもち、情熱を注いでいる。

本校の大きな特色として、少人数・複式学級よさがあげられる。少人数であるがゆえに一人一人の児童と向き合うことができることや、複式学級では、上学年の学習内容に触れ先の見通しをもつことができたり、前学年の学習内容を再度確認できたりと他学年との関わりが深まることである。本年度は、一人一人を大切にできる本校の利点を最大限生かして、子ども達一人一人が確かな学力を身に付けるために、個に応じた指導をより充実させていくことにした。

(3) 地域・児童の実態から

①地域について

本校は、熊本市の北西部にそびえる金峰山の山麓（標高230メートル）にある。学校の周囲にはミカン畑が広がり、その外側に人工林やシイ、カシなどの常緑広葉樹林が広がっている。金峰山一帯は、野鳥や野草の宝庫として知られ、県民に親しまれている。校区内には湧水も流れ、生活用水や農業用水として使われている。また、伝統的な肥後神楽が伝承されている神社や剣豪宮本武蔵ゆかりの寺院をはじめ、多くの史跡が残っており、恵まれた自然環境を活かし、伝統を受け継ぐ地域の人々のくらしがある。児童は地域の宝であり、地域の未来を担う大切な存在であることをしっかりと受け止めたい。

②児童について

恵まれた地域の中で育ってきた子どもたちは、明るく素直で、何事にも熱心に取り組むことができる。しかし、少人数であるがゆえに、多様な意見を出し合い、それらを交流させながら話し合うことが難しかったり、指示待ちであったりといった課題もある。そこで、これまで2年間の研究の主眼であった「子どもたちの主体的な学びにつながるような直間指導の在り方の工夫」を継続し、自ら学び、考えながら確かな学力を身に付ける子どもの育成に引き続き取り組むとともに、表現力に関わる言語活動に関する取り組みを、系統的に、且つ計画的に実践し取り組んでいくことにより、表現力豊かな子どもの育成につなげていくこととした。そして、卒業後、大人数の中で自分らしく、生き生きと活躍できるよう「生きる力」をはぐくみたい。

③学力の実態について

本校は複式学級のため日々直間指導で学習を進めている。そのため、十分定着ができていない児童に、授業の中でいかに支援をしていくかが課題となる。また間接指導では、自分で学習を進めていけるように授業のパターンを把握させたり、友だちとの学び合いの中で更に学習内容を理解していく活動を充実させることが大切である。

そこで本年度は、昨年度までの算数科の研究成果を生かしながら、①主体的に学ぶ態度の育成、②個に応じた指導の充実、③言語活動の充実について研究することにより主題に迫っていききたい。

3 研究主題のとらえ方

○「一人一人が確かな学力を身に付け、豊かに表現できる子どもの育成」とは

「一人一人」とは

・少人数・複式学級の特性を生かし、一人一人に対し、個に応じた教育をすること
ということ

「確かな学力を身に付け」とは

- ・基礎的・基本的な知識、技能の確実な定着のことである。読み・書き・計算といった知識・技能が授業や日常指導の中で一人一人に定着するように取り組む。
- ・習得した知識や技能を活用して、課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力を育成することである。
- ・「知りたい」「学びたい」という学習意欲を高めることである。

「豊かに表現できる」とは

- ・表現内容の精選である。学習したことや学習を通して考えたことを整理してまとめる力が必要である。
- ・自分の思いを相手に伝わるように分かりやすく表現するスキルを身に付けることである。特に算数においては、自分の考えを筋道を立てて説明できることである。表現することで、自分の考えを確かなものにすると共に自分や他者の考えのよさに気づきながら互いに学び合うことができる。ただし、考えを表現する過程では習得した知識・技能を活用しながら進めていくことが大切である。
- ・すべての活動を支えるものが言語力である。言語力を高めることで表現内容が更に深まり、表現するためのスキルの幅も広がる。

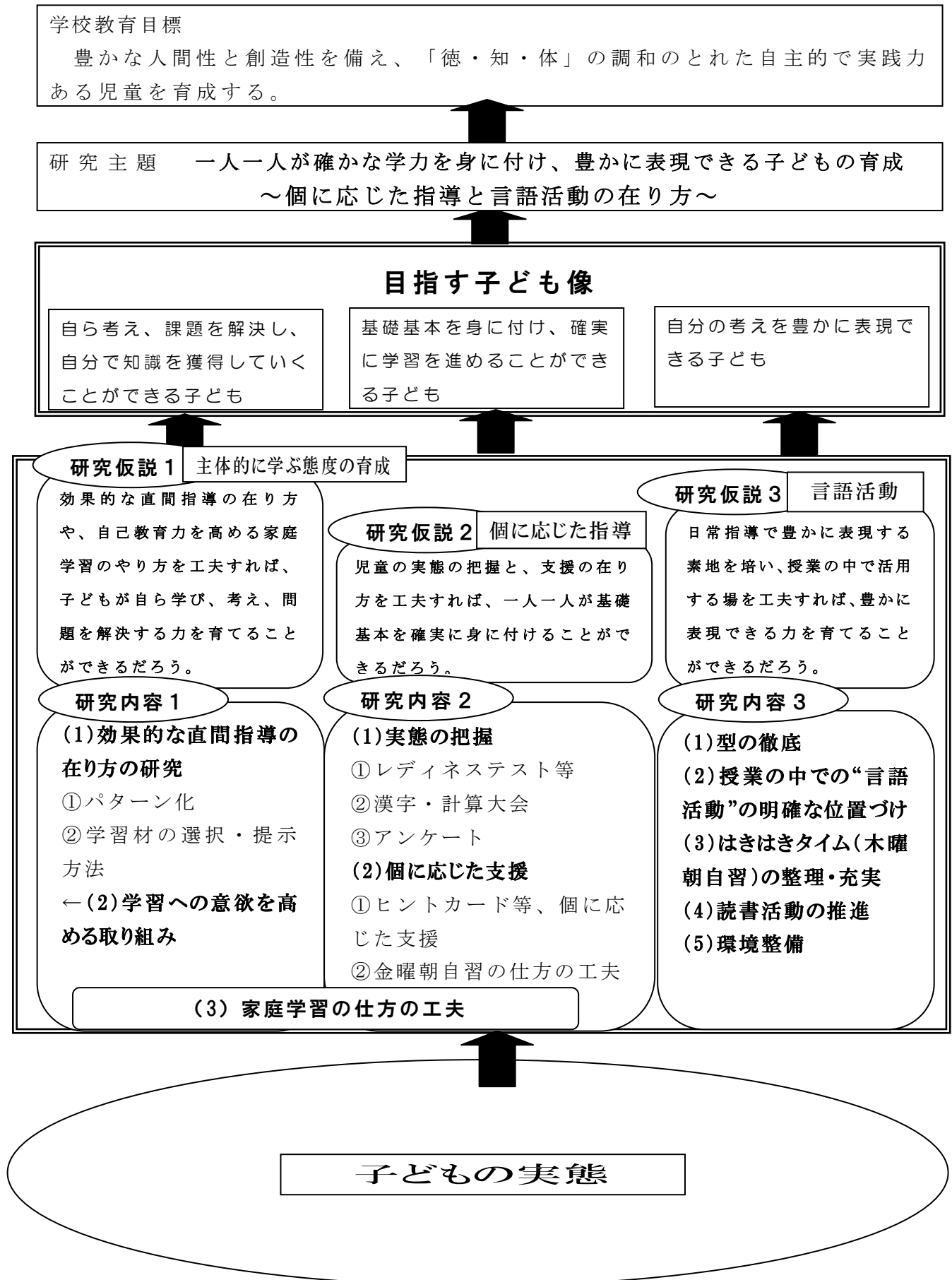
○「個に応じた指導と言語活動の在り方」とは

- ・子ども一人一人の課題に応じた指導を行うために、実態の把握、授業の中での支援の方策、家庭学習など授業外で個に応じるための工夫をどのようにすればよいかを追い求めること。
- ・言語活動とは何かを理解し、系統的指導、授業の中での言語活動の在り方、言語活動に関わる授業外での取り組みを、よりよい言語活動を実現するためにどのようにすればよいかを追い求めること。

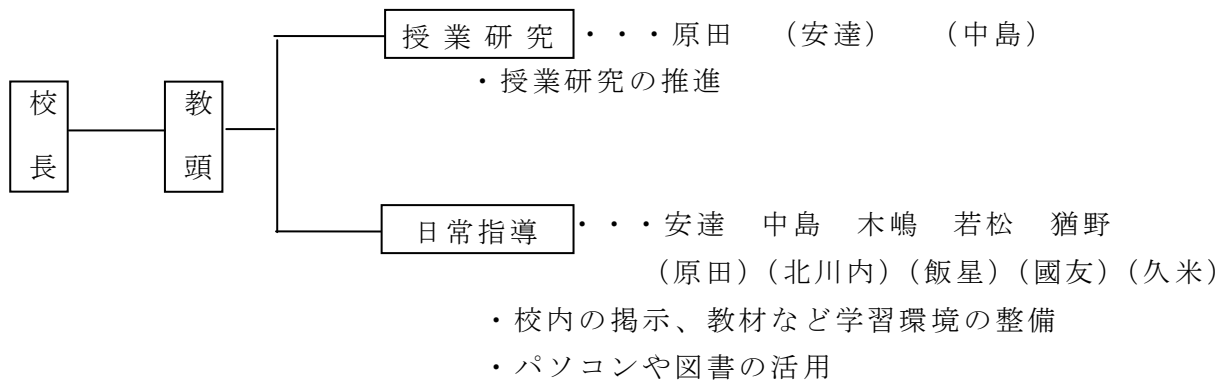
4 研究の仮説

仮説 1	効果的な直間指導の在り方や、自己教育力を高める家庭学習のやり方を工夫すれば、子どもが自ら学び、考え、問題を解決する力を育てることができるだろう。
仮説 2	児童の実態の把握と、支援の在り方を工夫すれば、一人一人が基礎基本を確実に身に付けることができるだろう。
仮説 3	日常指導で豊かに表現する素地を培い、授業の中で活用する場を工夫すれば、豊かに表現できる力を育てることができるだろう。

5 研究の全体構造



6 研究の組織



7 具体的取組と役割分担

	仮説 1	仮説 2	仮説 3
授業研究部	①授業のパターン化（直間指導のパターン化）【原田】 ＊学習の進め方のパターン化 ＊1時間の流れが分かる掲示 板の活用 ＊算数的活動の充実 ②課題設定の工夫【原田】 ＊題材選び ＊課題提示の仕方 ＊短時間でできる提示の工夫	①個に応じた支援の工夫【原田】 <自力解決時> ＊一人学びの時間の確保 ＊個人差に対応する手立て ＊ヒントカード、指示カードの工夫	①型の徹底【中島】 <自力解決時> ＊考えが整理されたノート作り <共同解決時> ＊話し合いの進め方マニュアル ＊説明の仕方の方法 （ノートを見せながら、具体物を動かしながら） ＊ホワイトボードの活用 ＊話し合いのまとめ方 ②授業の中での言語活動の明確な位置づけ【原田】
日常指導部	①家庭学習の仕方の工夫（家庭との連携）【中島】 ＊宿題の内容の提案 ＊児童自らによる計画的な家庭学習の展開のために	①実態の把握【安達】 ＊レディネステストの実施 ＊漢字・計算大会の活用 ＊アンケートの実施と考察（教師、児童、保護者） ②金曜日朝自習の仕方の工夫【中島・國友】 ③学びノート教室の活用【北川内・國友】	①型の徹底【中島】 ＊あらゆる教科、場で。 ②はきはきタイム（木曜朝自習）の整理・充実【安達】 ③読書活動の推進【安達・若松】 ＊火曜日朝自習 ＊家庭読書週間 ＊学校図書の充実 ＊本の紹介 ＊学習場面での図書の活用 ④学校環境整備【木嶋・猶野・飯星・久米】